

## 1. 「地域資源」を活かした交流～日光市三依地区の人と人との関わりに焦点を当てて～

### (1) 三依地区の概要～歴史を踏まえて～

本論文の中では、世界遺産として有名な日光東照宮が置かれる栃木県日光市の三依という集落の事例を参考にし、「人」を「地域資源」とした交流について考察していく。

栃木県日光市は、前述の通り日光東照宮が最も有名であり、その他にも奥日光の中禅寺湖や華厳の滝、鬼怒川温泉や川治温泉などが点在し、全国的にも名の知られた観光地である<sup>i</sup>。世界遺産登録地ということもあり、外国人の来訪の多い日光市は近年の国際化を推進する方針をとり、平成 25 年度から平成 29 年度までの 5 年間を期間とし「日光市国際化基本計画<sup>ii</sup>」が定められた。

日光市今市地区(旧今市市)から福島県会津若松市までを結ぶ 121 号線は、通称会津西街道と呼ばれ、江戸時代は関東と東北を結ぶ道として物流の要となった。三依地区は、その会津西街道沿いに位置し、古くは中三依宿として馬の生産や炭焼きの地域として栄えた。

現在の三依地域は、五十里・独鈷沢・芹沢・中三依・上三依・横川の六つの集落で構成されている。以前は三依村という独立した村であったが、1995 年 5 月 5 日に藤原町の一部となり、2006 年 3 月以降は現在の所属である日光市に吸収され現在に至る。そして三依地区は、65 歳以上の人口が地域の 3 分の 2 を占める「限界集落」として知られている。

### (2) 古代村～人が集まる場所から見えるもの～

その一方で、三依地区を流れる男鹿川は釣りの名所として知られており、シーズンには釣り人が多く集まる。釣り人の多く集まる場所として、男鹿川沿いに古代村という蕎麦屋がある。古代村は塩生さんという一家で経営し、蕎麦屋のほかにもロッジを併設している。もちろん来客は釣り人だけではなく、自然を楽しみたい人、家族でのんびりしたい人、バイクでツーリングをしている人、など多種多様な目的で人々は集まる。三依地区は山の奥に位置するも、東武鉄道や野岩鉄道の連携により首都圏からの交通の便も良い。そのため東京都、埼玉県、千葉県など県外からの来訪も多く、週に 1 度三依地区を訪れる常連客もいるほどだ。中には古代村周辺の畑を借り、農業を営みに来る者もいる。

「何もない」と言われる田舎である三依地区に、なぜこのように人が集まるのだろうか。それは自然が豊かであることや、都会の喧騒を離れたのどかな環境であることも宛ら、三依地域と、訪れる人の仲介となる「人」の存在も大きい。古代村を経営する塩生さんは、三依地区の活性化のため、数年前から地域のイベントの改善や外部との交流を斡旋させる等努力を続けている。蕎麦屋を訪れるお客との会話も積極的に行い、三依の良さを語る姿をよく見かける。

「三依地区は、スカイツリーとおんなじ高さなんですよ。電車からの風景もなんか変わってますよね～。来るときトンネルばっかだったでしょ。トンネルぬけたら突然集落が開けて、いきなり雰囲気かわるんです。そこで、気になって三依で降りちゃう人も多いですよね～」と、お客さんに話すことが多かった。塩生さんは、50 代ぐらいの中肉中背の男

性で、語尾が上がる栃木弁の印象が強い。「だいじ、だいじ〜<sup>iii</sup>」と地域の人を励ます姿がよく見られた。温厚な性格で、地域の人々の信頼も厚い。

三依地区内で毎年9月に行われる「山のものなんでもござる祭り」の実行委員長も2年連続でつとめ、地域の人を巻き込んでの地域活性化に尽力した。「山のものなんでもござる祭り」は毎年同時期に行われているが、認知度も低い状況で広報活動の面で苦戦していた。塩生さんが実行委員長になってからは、主にインターネット媒体での方向に専念しフェイスブックを活用しながら広報活動に力を入れた。その結果、年々認知度も高まりはじめ来場数にも増加の傾向が見られる。

お祭りの最中も、地域の人々と外部の交流の場が設けられ、和気あいあいとした声が他方から聞こえてきた。目の前で餅をついてとち餅<sup>iv</sup>を販売したり、地域の野菜を紹介したり、伝統民芸の体験コーナーを用いる等、三依地区ならではの催し物が用意され、人々は思い思いに楽しんでいた。売り出される商品も手作り、そして屋台の装飾も手作りのものが多く、お祭り全体からは「人」の手作りの温かさが感じられた。自然に囲まれた地域だからこそ、その温かさが一層強く感じられた。三依地区ならではの温かさを感じる機会である。

### (3) 「限界集落」を超えて

三依地区は「限界集落」というマイナスイメージを持つ地域ではあるが、このように地域のためを思い試行錯誤している人もいることに気づくことができた。三依のように、自然が豊かで美しい景色があるという先天的な条件も十分な「地域資源」ではあるが、それを外の人に伝えるために努力する人たちがいて、そしてその資源を残そうと奮起している「人」の存在も忘れてはならない。

三依地区は「不思議な雰囲気があり、理由もなくファンになってしまう人もいる」ということを地域の人から教えてもらったことがある。その理由は、地域の「人」にあるのではないかと思う。外部の人を受け入れ地域活性化を思案する塩生さんも、その姿は非常に生き活きとして、地域の明るさを際立てている。塩生さんに限らず、「人」の頑張る姿は地域の良さを形作り、そしてその「人」も「地域資源」として来訪者の心を誘う。先天的な地域の美しさに加えて、その地域に生きる人も「地域資源」なのである。

---

<sup>i</sup> 「日光市公式 HP」(2014年1月17日最終閲覧)

<http://www.city.nikko.lg.jp/>

<sup>ii</sup> 「日光市国際化基本計画」(2014年1月17日最終閲覧)

<http://www.city.nikko.lg.jp/kouryuu/gyousei/shisei/kokusaikakihonkeikaku/documents/kokusaikakihonkeikaku.pdf>

<sup>iii</sup> 栃木弁で大丈夫という意味

<sup>iv</sup> 山間部で利用されてきたとされる栃の実と餅を加工して作ったもの。

参考: 「木のメモ帳」(2014年1月17日最終閲覧)

<http://www.geocities.jp/kinomemocho/index.html>